

With コロナ時代に求められること

音楽学者 久保田 慶一

1. With コロナ時代の課題

コロナ・パンデミックによって我々の生活が不安に陥れられ、不便な生活を強いられるようになって、かれこれ2年という歳月が経った。感染の合間を縫うように知人と再会するが、2年前のことがつい昨日のことに感じられる。この間の2年という歳月の隔たりがあることが実感できないのである。コロナ・パンデミック前と同じ仕事をし、そのうえ感染対策のために神経をすり減らしているのに。おそらく日々の生活を淡々と送っているにしても、心の底になにかしらの不安が横たわっていて、何をしても気はそぞろで、生活そのものに実感が持てず、仕事や学習の成果すらも心から喜べないからであろう。

ソーシャル・「ディスタンス」や「リモート」という言葉からも明らかなように、求められるのは「離れる」ことである。コロナ・ウィルスはエアロゾルによる空気感染によって伝播することから、人が物理的そして生物的に隔離されることが求められるからだ。それによって、不安を軽減してくれるはずのコミュニケーションが阻害されているばかりか、都会で一人暮らしの大学生などに至っては、大学にもいけず、自宅でオンライン授業を受け、帰省しようにも家族からは帰ってくるなと「拒絶」されてしまうわけである。

「With コロナの時代」を前に、我々はさまざまな課題を解決していかななくてはならない。そのひとつがこの「ディスタンス」や「リモート」という「物理的・生物的な」隔たりによって生じる「社会的・心理的な」隔たりを、いかに克服するかであろうか。コロナ・ウィルスはすべての人に平等に侵入してくる。しかし原因は同じでも結果は異なる。年齢や基礎疾患のあるなしでも症状は異なるし、その人の生活状況や経済状況でも異なる。オンライン授業にしてもWi-Fiの環境が整備できている学生とそうでない学生もいる。ここには社会階層という「社会的・経済的な」隔たりがあることを忘れてはならない。しかし「社会的・経済的な」隔たりという問題はここでは論じないでおこう。ここではむしろWith コロナ時代にどう生きていくかという、個人と音楽活動に限って、「社会的・心理的な」隔たりを克服する方策について考えてみたい。

2. 課題としての「隔たり」

「ディスタンス」や「リモート」という隔たりは、「空間的な」隔たりだけではない。我々は今回「時間的な」隔たりを経験したのではないだろうか。「この2年間、何をしていたんだろう」という気持ちは、コロナ・パンデミックの前後で時間が隔てられているからであろう。コロナ・ウィルス感染の後遺症で元の日常生活が取り戻せない、職場を失った、あるいは家族を失ったということで、その人の人生はコロナ・パンデミック前後で引き裂かれてしまったわけだ。コロナ・パンデミックはその人のキャリアに「時間的な」隔たり、あるいは不連続性という傷跡を残している。「ポスト・トラマティック・グロース（心的外傷後成長）」という言葉がある。人が

辛い経験したことで精神的に成長することを意味する臨床心理学の言葉であるが、自らの成長を実感して、このキャリアの断絶というトラウマをポジティブに評価できるようになるためには、辛くて長い時間が必要だろう。

オンラインといっても、インターネット上のつながりであって、ただ文字、音声、画像が伝達できる状態になっているだけなのだ。実際はと言えば、相手の顔の表情がわからない、視線があわない、感情的な交流が難しく、本当の意味での確認や合意は難しい。オンライン会議での意思決定の「質」が問われるのも当然だろう。

オンラインでの人と人の紐帯も危うい。ラインやメールでのやりとりも情報伝達だけであり、情を通わせて話をするのではない。やはり相手の表情や眼を見て会話し、発せられる言葉の抑揚の変化を通して、お互いの心が理解できるわけである。大学のオンライン講義でも、大学教員からすれば、学生全員がビデオオフにしているので、彼らが理解しているのか、していないのかも判断できないのだ。学生からすればパソコンをオンにしているだけで出席になるわけだから、オンライン講義での学習の「質」もまた問われてしかるべきなのだ。

音楽活動についても同じだろう。オンラインによる演奏参加のデメリットも感じたに違いない聴衆だが、メリットを感じたのも事実だ。遠くの演奏会場に行く必要はなく、音質のよい演奏であればそこそこに満足できるからだ。オペラだと、歌手の表情がつぶさに見れて迫力ある映像も楽しめる。音質あるいは時間的ずれなどの技術的問題はやがて解決されていくだろう。そうすると、リモートの演奏はリアルな演奏の「急場の代替」ではなく、ますますオータナティブなものになるだろう。制作・配信する側も鑑賞する側も、選択できる選択肢になるにちがいない。しかしそうなるとはいっても、いくら臨場感に溢れる映像音響配信であっても、そこにはやはり、演奏者と聴衆とが同じ空間にいて同じ音を共有できないという「隔たり」は、克服すべき課題として残り続けるであろう。

3.求められる自律とは

一人一人の人生や生活に隔たりが生じ、職場や学校からも隔てられ、演奏者と聴衆も隔てられるとなれば、これまで「ひとつ」あるいは「ひとつながり」であったものが「分断」される。そうして部分は「分散」された状態になる。ではこうした状態を受け止めつつ日々の生活を送り、未来に向かって前進していくために、何が必要なのだろうか。そのひとつとして考えられるのが、個人の「自律性」なのかもしれない。以下では、拙著『新・音楽とキャリア』（スタイルノート、2019年）の「終章：私のキャリア論」の一部を引用しながら、「自律」とこれに関連した「自由」について考察してみたい。

「自律」とはなにか。「自律」の「自」は「みずから」と読む。「おのずから」は正式な読みではない。「みずから」は「自分自身で」で、「おのずから」は「自然に」「ひとりで」という意味となる。もともとは「みつから」あるいは「おのつから」である。「み」は「身」、つまり自分である。「つ」は「～の」の意味で、例えば、まつげは「目の毛」である。「から」は「柄」で、本質を表し、「人柄」や「家柄」などの言葉もある。

自律に関連した言葉に「自由」がある。「自由」という言葉は仏教に起因する言葉である。「自を由（ゆえ）とする」という意味である。「由」とは「理由」という言葉に見るように、「根拠」や「拠り所」である。では、自分を根拠にするということは、例えば、自分で自分の行動を決めることが、行動の自由である。反対は「不自由」であり、「強制」であったり、「服従」であったりする。

しかし自由というのは、自分の好き勝手にすることではない。例えば、お腹が空いたからと言って、授業中にお弁当を食べることが、その人の自由だと思える人はいないであろう。道徳に反しているばかりか、お腹が空いたので何かが食べたいという生理的欲求、本能、自然法則に、支配されているからである。古川雄嗣は、著書『西

洋近代思想を問い直す』(東京経済新報社、2018年)の中で、こう説明している。

「しかし、人間だけは、自然法則に服従するのではなく、自分自身の命令に服従することができます。身体は自然法則が「食べよ」と命令しても、その命令に逆らって、「食べるな」という精神の命令の方に従うことができるのです。このように、自然の法則から解放されて、自分で自分の行動を決定できるということ。これが人間の「自由」です。そして、その自由に基づいて、自分で自分の行動を決定すること。それが「自律」です。文字どおり、自分で自分を律するのです。かくして、この意味での「自由」と「自律」こそ、人間—動物と機械とは異なる—「人間」であることの本質である、ということになるわけです。」(p.124-5)

自分を律して、自分に命令するのは、理性であり道徳である。では理性とは何か、道徳とは何かという質問に答えることは難しく、この小論の域を超えている。

4.With コロナ時代の自律した生活

コロナ・パンデミックの前後で、これまでの人生が終わってしまう人、中断されても再開できる人、あるいは再開できない人、そして新しい人生をはじめの人など、さまざまだ。しかしどんな状況にあっても、自分は存在し、また自律と自由は残されているはずであり、コロナ・パンデミック後の人生を決定するのは自分でありたい。家族の人や学校の教師からの助言を謙虚に聴く、そしてさまざまな情報を集めて、公平無私な気持ちで分析することは必要であるが、外部からの言葉や情報に支配されたり、制約されたり、翻弄されたりはしたくない。何もかもひとりでやれば、面倒でなくていいわけだから、自然の法則に支配されては、自由はないからである。

ではどうすれば、自分で決めることができるのか。これも簡単に答えることはできないが、やはり人間の存在は自分ひとりであって、他人とは分かち合える存在ではない、だからこそ、他人を尊重するのと同じように、自分自身を大切にすることが必要であるという認識をもって、日常生活を送ることではないかと思う。具体的に、いくつかの状況を考えてみよう。

この2年間という「隔たり」によって、人生は分断された。おそらくこうした分断は、これからも生じるだろう。自然災害や経済危機、個人のレベルでは病気や家族の死などによって、人生は分断される。同じように、現在雇用されて働いている人は転職したり、あるいはもう一度学びなおし(アンラーニング)のために大学や大学院に入学したりすることも、人生を分断することであり、分散させることでもあろう。コロナ・パンデミックのために巣籠状態になったことで、これまでできなかったことをはじめたという人もいるにちがいない。こうして分断を通してキャリアを継続させていくにも、個人が自由に自律していなくてはならない。

大学生が自宅でオンラインの授業を受ける場合にも、通学時間を必要としないので、日常生活との切り換えが難しい。受講するだけでなく課題の提出などもあり、日々の生活を規則正しく、計画をもって送ることが求められる。一人暮らしだと生活のリズムも乱れがちだ。こうした自宅学習を継続していくためにも、自律性が求められるだろう。同時に、何のための学習するのかという目的意識が高くないと、継続するのは難しい。リカレント教育に求められる、学びたいという強い気持ちが必要なのである。こうなると、人生において分散されるリカレント教育と大学のリモート教育は、学習者の自律性を前提にした教育となる。

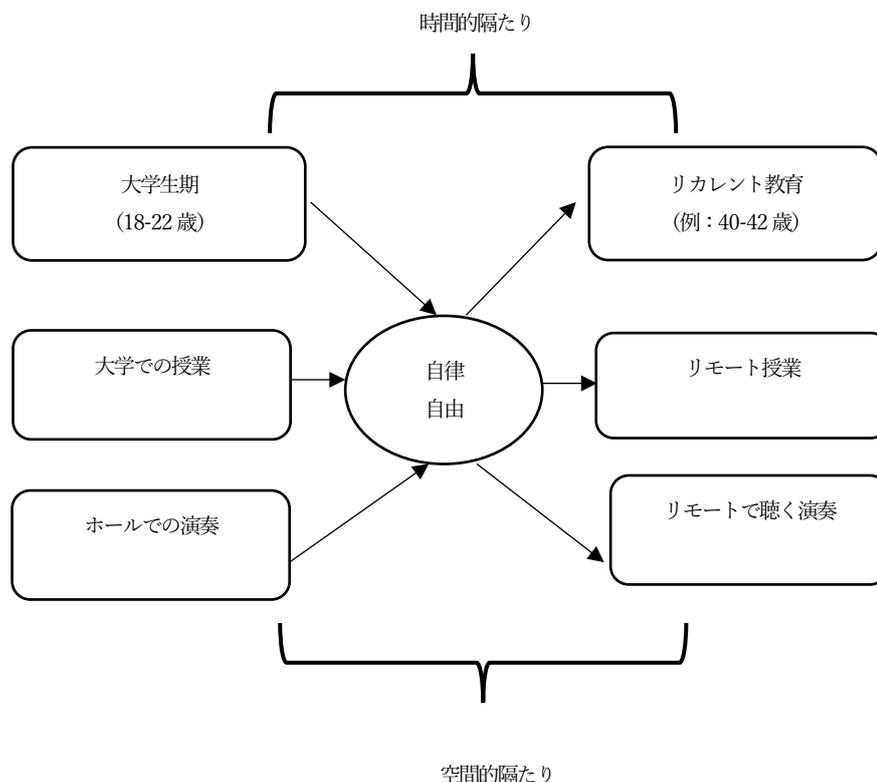
5.With コロナ時代の音楽経験

ではリモートの音楽活動では何が求められるのだろうか。リモート演奏に望めないことは、演奏者が発した声

や楽器を直接的に聴くことである。声帯や弦などの振動が共有する空間（空気）を通して、自分の鼓膜に伝わらないことである。スピーカーを通じて音が聴こえても画面で演奏する姿が見えても、そこが決定的に違う。これはリモート授業についても言えるが、教員の声の質などは問題にはならないので、同じにはならないかもしれないが。

ではこれをどう補うのか。筆者が考えるのは、それを補うのは聴者の想像力、あるいは「音楽の力」だと思っている。生の音が聴けなくとも、その音や音楽と「個人的なつながり」をもつということである。受け身で音楽を聴くのではなく、聴こえてくる音楽と自分自身とのつながりを自分自身で見つけるのである。例えば、東日本大震災の復興支援歌として創作された歌「花は咲く」も、震災で亡くなられた方の追悼歌として聴くのではなく、自分にとって大切だった人（あるいはペット）の死を追悼する歌として聴いてみてはどうだろうか。自分と音楽のつながりは、自分に任されている。その意味で自由であり、自律的であることなのである。

リカレント教育では過去にいた自分と未来の自分をつなげ、リモート教育では大学の講義室にいる自分と自宅にいる自分とつなげ、そしてリモート演奏ではコンサート会場にいる自分と自宅にいる自分とをつなげるのである。それを可能にして「隔たり」の紐帯となってくれるのが、自分自身が自律的であり自由であることなのではないだろうか。



【参考文献】

久保田慶一『新・音楽とキャリア』 スタイルノート 2019年
 古川雄嗣『西洋近代思想を問い直す』 東京経済新報社 2018年